

聖書の教理に立つ靈性育成へ

——宮川経輝牧師の説教が描く救済の神学——

棚 村 重 行

I. はじめに——宮川経輝牧師の神学とはどのような信仰的世界か？

1. 宮川経輝師（以下宮川師と略）はどのような人物であり、また神学的貢献をなした人物なのか？

1857（安政4）年2月19日-1936（昭和11）年3月2日、熊本県（肥後）の生まれである。熊本洋学校に学び、1876（明治9）年に「奉教趣意書」に友人らと署名し「熊本バンド」を結成し、その年洋学校教師L. L. ジェーンズから受洗した。1876年9月に同志社英学校に進み学んだ後、79（明治12）年同校を卒業した。短期間大阪の女学校勤務後、1882（明治15）年日本組合基督教会所属の大阪教会牧師に就任し、1925（大正14）年に辞職するまで、40年以上この浪花なる一大商業都市圏での牧会に当たった。その結果、日本組合基督教会の三元老（小崎弘道、海老名弾正、宮川経輝）の一人と呼ばれ、また所属教派こそ違え、同時代に共に伝道と説教活動を通して救済神学の福音を全国に発信した富士見町教会牧師、植村正久と並び立ち、明治期以後の我が国の教界に勇名を轟かせたのである¹⁾。

上記の歩みを辿った宮川師は、日本の福音主義神学思想史の最初期において師自身の独自の福音主義的靈性論も説き、かつ実践してきた。本稿の目標は、

1) 項目「みやがわつねてる 宮川経輝」『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1980年）、1366頁。記事の筆者は高橋虔氏。なおこの注1の記述は、高橋氏の上記の記事をもとに棚村の責任でまとめたもの。

何よりも宮川師の神学的営為の内容を紹介・解説しつつ、従来余り注目されなかった師の「聖書的教理に立つ靈性育成」の先駆的業績を、今日の神学的読者に紹介することである²⁾。

2. 「教理」、「靈性」、「靈的生活」とは——本稿でどのように定義・使用されるのか？

カトリック教会、及び福音主義的プロテスタント諸教会において、これら三つの用語は、どのように定義・使用されているのか、先ずは教会史的に長い歴史を有するカトリック教会の立場を紹介し、次いで宗教改革的伝統を尊重する福音主義的プロテスタント諸教会のそれを再確認したい。

(a) 長い伝統をもつカトリック教会では、「教理 (doctrine)」は、『現代カトリック事典』によれば、注3の文章にあるように定義される³⁾。要はローマ・カトリック教会の制度的な権威が公式に承認した諸真理に関する教えることである。我々は当然のことながら、定義上も多くの教理内容上もこの立場には賛同していない。

(b) 「靈性」については、「靈性」＝「靈的生活」とほぼ同義であると両教会においても理解されてきた⁴⁾。だが注4で示すように、事典記事のこのカトリック教会的定義では余りに聖霊論中心的で偏っているので、本稿では三一論的な福音主義的キリスト教の立場で以下の定義を提案する。即ち本稿の「聖書

2) なお本論文は、2022年6月22日に日本基督教団大阪教会の聖日礼拝後になされた講演の原稿を講演者の責任の下でタイトルを変更し新記述も加え、本学の『神学』寄稿用に大幅に書き改めた論文である。機会を提供下さった本庄侑子牧師と教会の御好意に改めて感謝する。

3) 項目「教理」、J. A. ハードン編、浜寛五郎訳『現代カトリック事典』（エンデルレ書店、昭和57年）、169頁。「信者が認める必要があるものとして教会が教えるすべての真理。……いずれの場合にも、教会の権威が信すべきものと教えることによって教理になる。……教義 (dogma) は神から正式に啓示されたものとして教会が提示する教理である。……」。

4) 項目「靈的生活」、注3の同掲書、708頁の記事。「信者の靈魂に内在し、徳の実践において神を賛美し神を愛し神に仕えることができるようにさせる聖霊の導きによる生活……」とカトリック、プロテスタントの区別なく使用可能と示唆された曖昧な仕方 で定義される。

的教理に立つ靈性（又は靈的生活）」とは、「礼拝のなかで取りつがれる聖書正典が証しする教理的証言を根本基準とし、その正典に規制される準基準である諸基本信条に従い、聖書の教理の真理が解き明かされ、説教される三位一体神を賛美し、その三一神を愛し仕えることができるよう三一神の一位格である聖靈の働きで育成される靈性＝靈的生活を意味する」⁵⁾。

3. 本稿の議論のための幾つかの前置き——「説教する人」、「神学する人」、 「靈性の人」

以上、I-1, 2では、本稿における基本用語の定義や解説を短く行った。最後に、本稿の以後の本格的展開の前に、本稿のタイトルに示された研究主題とその目的、また本稿の中で使用される神学的基本用語や使用される基本的第一次資料、そして議論の背後にある資料解釈の方法論等を紹介する。

(a) 宮川経輝師の神学思想研究の基本資料について、実践神学研究加藤常昭氏は、近代日本説教史という氏の専門分野からの判断だが、以下のように語った：「もし、宮川神学と呼びうるものがあるとすれば、それはまさしく説教の中で形成されたのである。……宮川は何よりも『説教する』ことにおいて『神学する人』であった。……105篇に及ぶ『説教集』二巻を読むだけでも、宮川の説教の特質を捕うことは確かである。……」⁶⁾。

加藤氏のかかる判断は、宮川師の『説教集』二巻のもつ実践神学的な意義のみならず、本稿のような宮川師の作品の有する歴史神学的な意義を解明する研究を志す立場にとっても有意義である。なぜならば、氏が指摘するように、この近代日本における伝道草分け時代には、宮川師も含め神学の一分野だけに絞

5) ここでの「基本信条」とは、古代公同教会で告白された「使徒信条」、「ニカイア信条」、「アタナシオス信条」のいずれか、ないしすべてを「聖書正典により規制された規範」とする立場。「日本基督教団信仰告白」の場合、「福音主義的前文（教理）+使徒信条」の告白形式をとるが、他教派や教団の諸信条重視の教会の場合には更に複数の信条の選択の可能性があるだろう。

6) 加藤常昭『日本の説教者たち 日本キリスト教説教史研究 I』（新教出版社、1972年）、99頁。

って方法論的に整えられた説教的方法の専門的研究に徹するなどは思いもよらぬ時代であった。実態は、加藤氏が指摘するように、牧師は誰もが「『説教する』ことにおいて『神学する人』であった」に違いない。いや更に言えば、「説教する人」は「神学する人」のみならず、「霊性の人」たらねばならなかった。このような殆ど「フル回転的」牧師や信徒たちを必要とする明治期日本の教会形成時代は、大阪教会牧師宮川経輝師にも、同時代の植村正久師にも、いや当時の他の多数の牧師達にとってもさぞかし重い課題であったに違いない。

(b) 以上の理由から、我々が以下展開する研究は、こうした明治初期の指導的牧師が必然的に避けられない宗教的三重の課題を念頭に置き、本稿の研究主題の中心は、加藤氏流に以下のように要約できよう：「説教する人」としての宮川経輝師が105篇におよぶ説教の各テキストに表明した「神学する人」として、どのような救いの「聖書的教理」を解き明かし、自らと教会会衆を「霊性の人」へと育成しようとしたかを問いたい。だから本研究の方法は、特に宮川師の二巻の『宮川先生説教集 前編・後編』を主たる第一次資料として分析し、上記の主要テーマに対する解答を見出すことを願うものである⁷⁾。

Ⅱ. 宮川師の「聖書的教理」の六主題

——聖書的救済の「教理」とは何か (What Are Doctrines?)

A. 「説教する人」・「神学する人」宮川師にとって「救済の教理」とは？

1. 導入——宮川師が取り組んだ「聖書的教理」説教の一事例

上記の表題が提起した問いに対する、宮川師の解答としては、以下の説教が

7) 本論文の主たる第一次資料は、宮川経輝牧師の二巻の説教集、『宮川先生説教集 前・後編』（昭和8年、大阪：福音社書店）である。以下本稿では、『前編』、『後編』と略す（注：師の説教集は聴衆により速記された文章を後に二巻の説教集の形で刊行された。これらの説教記録自体は詳細で格調高い明治期以後の日本語による文章である。本稿では、これら説教集全二巻から論者棚村が選択した説教の要約を現代語で紹介する。従って宮川師の説教の要旨は、全て棚村の文責で平易な現代的表現に改めた文章である。また必要に応じて、師の重要な神学思想を明らかにするため、時折本文ないし注で、上記二巻の説教集から原文を引用することができる）。

役立つと思うので、この説教の概要と分析を紹介し、上記の問いへの答えを見出したい。

説教「聖徒の生活」(明治 36 [1903] 年, 9 月)⁸⁾：主題「真の宗教から真の道德へ」(棚村表記)。

(a) その要旨：『『聖徒』とは、旧約では神が選んだイスラエルだが、新約では神が選んだ『信者』である。これは『神と人との間柄に関わる者』の意味で、人と人との聖なる間柄を言うのではない。だから奇跡を行い教会に公認された聖人らを崇めるカトリックと違う。逆に聖書の言う聖徒とは、i) 神に召されたる者だと自覚し、己が心を主に捧げる人、ii) 『神の喜ぶべきみ旨を知る』人で、聖書を読み神の知識を心の中に満たす人だ。iii) そこで『聖徒の生活』とは、聖書を通し心の中で知った天の父の聖志を知り行うことだ。それは第一に『心を神に捧ぐること』。第二に『神の神意を己が心に満たすこと』。第三に『神の聖意が言葉や行ひになり』生き様に現れることだ。長年日本人は人と人との関係を中心とし、親に孝、君に忠、子には慈、弟妹には愛を教えた。逆にキリストは『神と我との関係が聖になるなら、人と人との関係が義となり、仁(じん=愛)となる』と教えた。この根本的なキリスト教と日本の宗教の相違を自覚していきたい」。

(b) コメント：宮川師の見解では、聖書教理的なタテの「神-我」関係が宗教的に確立して初めて、倫理道德的なヨコの「我-我ら」関係の形成が可能と見る。逆に神の御前にあるタテ関係に生きる「稽古」(訓練)が出来ていないのに、己を愛する如く隣人を愛するヨコ関係倫理の展開は困難である。師の指摘は現代も変わらぬ神-我関係を土台としている。

8) 『前編』, 28-39 頁。なおこの説教の中心テキストは、ペテロ前書〔現行のペトロの手紙一〕1:14-15。

2. 宮川師の諸説教における「聖書の教理」の中心にある「救済の教理（神学）」のテーマ

師の説教「聖徒の生活」の上記の内容分析の中で、我々は、本稿が主張する宗教から倫理・道徳へ生活の基盤を据える救済の教理（神学）の今日的な意義を指摘した。次に、宮川師の二巻の説教集を素材として、棚村が分析した師の説教の教理的柱をなす六つの基本的な項目を紹介しておきたい。それは以下の通りである：1. 人の罪過（旧我）とキリストにより新我を得る救いの道；2. 贖罪の主の先行の恵みと救済的感化；3. キリストの十字架上の神の愛と義（正義）による救い；4. 「神－我」関係から「我－我ら」関係による救いへ；5. 教会形成となる神－人間の「交際（交流）愛」の救い；6. 理想の教会は「キリストを頭、教会員はその身体共同体」なる救いの諸項目である。次に以下のI-Bにおける論述では、先ず「聖書の教理」の六テーマに沿った宮川師の代表的説教を取り上げ、師の「救済の（教理）神学」の内容を紹介しコメントを付したい。

B. 「説教する人」の六説教から学ぶ「神学する人」宮川師の救済の神学（教理）

1. 説教「二人の我れ」（大正3〔1914〕年、4月）⁹⁾：主題「人の罪過なる旧我（劣等我）とキリストにより新我（高尚我）を得る救い」

(a) その要旨：「北米の雑誌にあったが、人の心が病的な発達をすると、一人の人のなかに二重・三重の人格が現われると。平生の生活でも、自分や他人の内に二人の人格がいることに気づく。ある教会で、息子さんと娘さんがキリスト教信者になった。その影響で老婆さんも洗礼を受け熱心な信者になった。だがある日、隣の家から火事が出て驚いた老婆さんは何と祈ったか、『南無阿弥陀仏！』と。この方は『新我』ではキリスト教徒、『旧我』では仏教徒だ。我々はこの人格の矛盾をどう乗り越えてゆくのか？ 要は分裂した二人ではなく一人の人となることだ。その為にキリストを見上げねばならぬ。神の御

9) 『後編』、57-65頁。なお聖書テキストは、ヨブ記32:8; ロマ書8:5-6。

旨でキリストは人となられ、『我が心のままをなさんとするにあらず、御心に任せたまへ』と祈られた。古い我が消え、新しい我となる。劣等我がなくなり高尚我となる。宮川師は説教を結ぶ、『諸君も何〔ど〕うぞ、そう云う〔高尚〕我におなりになることを……お勧めする』と。

(b) コメント：この説教の重要性は、キリスト教徒になりたての老信者に限らず、我々の「新我」に巣くう古い罪過・旧我を暴いたことだ。そのみならず、「新我」、「高尚我」の真の誕生が信者の内に起こるように、師はキリストの助力を祈り、教会の構成員の為に教えを説く。我らも主に祈り教理を学び道徳的にも正される道を歩むべきだ。

2. 説教「感化の源泉」(明治 35 [1902] 年, 7 月)¹⁰⁾：主題「贖罪の主の先行の恵みと、主の救済的感化に聖晩餐を介し参与する道」

(a) その要旨：「生ける万物は、皆環境の感化を受けて生きる。その感化には、第一に作り事により影響を与える感化、第二に作り事なしに与える感化がある。この第二の感化を広く及ぼしたのがキリストだ。ヘブル書 7:26 にある：『……彼（キリスト）は清潔^{きよく}して罪人に遠かれり。且つ天よりも高し』と。キリストは聖意と行為に一点の罪もなかった。人間の中には一時立派な言行で感化を与える人はいるがすぐ消える。その姿は一人の歌舞伎役者がくるくる役を変えるようなものだ。これと違い主キリストの感化は一貫して我々の心をつかんで離さぬ。ロマ書 5 章の聖句は言う：『それ義人の為に死ぬる者殆どまれなり。……然れどキリストは我等の^きなお罪人たる時我らの為に死に給えり。……』と。キリストは先ず命を捨ててお救い下さった。この主の先行の恵みがキリスト教の『感化の源泉』だ。師は聖餐卓^{うらお}の前に結ぶ、『……皆さんもこの感化の潤う所においてパンを食し杯より飲んでもらひたい』と。

(b) コメント：この説教では、宮川師の教理的救済論の根には主イエスに発し、使徒パウロを介し、ルターやカルヴァン、ピューリタンらが保持した「先

10) 『前編』, 1-13 頁。なおこの説教の中心テキストは、ヘブル書 7:26。

行するキリストの恵み」が堅く据えられている。先行の恵みという「感化の源泉」の土台に師以来 100 年以上も変わらずに大阪教会が堅く立ち、正しく説教と聖礼典に参与する証しは大いなる信仰的な資産である。

3. 説教「我独り澄めり^すにて可^かならんや」(明治 43 [1910] 年, 2 月)¹¹⁾(説教題の現代語訳は「私一人が純粹であってよいのか?」): 主題「キリストの十字架上の神の愛と義(正義)の結合による救い」

(a) その要旨:「今朝のマタイ伝 5:13-16 にあるキリストの『あなた方は地の塩である……』の言葉は『極めて辛い正義の人たれ』という意味ではない。それは 20 節で説明される:『……あなた方の義が律法学者やファリサイ派の人々にまさっていなければ、あなたがたは決して天国に入ることができない』と。正義には二つの方向がある。第一は『静的なそれ』で、お高くとまっていた人は近づかない。だが第二は『動的で動くもの』で、キリストやパウロが教える『人を救う愛』である。日本語に『良い塩梅^{あんばい}』という言葉がある。塩が加わらないと美味しくならない。だから主イエスが『なんじらは地の塩なり』と言われたように、塩辛く正義を貫かなくてはならぬ。だが『我独り澄めり^す』ではなく、主イエスの如く十字架にかけける罪人すら愛し『他人を救ねばならない』。このイエスの義と愛の痛みを負って罪人と係る心を我が心とすべきである」。

(b) コメント: この宮川師の説教にある義と愛の関係の重大ポイントを最も簡潔に讃美歌で表現したのは『讃美歌第一編』262 番の一節だ:「十字架のもとぞ いとやすけき 神の義と愛のあえるところ」。これが本説教の要点だ。ともあれ『我独り澄めり^す』ではなく、神の子イエスは己を十字架にかけけるほどの罪人を愛する主であったと讃美歌は歌う。

11) 『前編』, 388-402 頁。なおこの説教の中心テキストは、マタイ伝 5:13, 14, 16。

4. 説教「根本の教義」(明治 41 [1908] 年, 3 月)¹²⁾: 主題「『神-我関係 (宗教)』から『我-我ら関係 (道德)』へ移行する転換の重大性」

(a) その要旨: 「日本人にはなぜキリスト教の棄教者が多いのか。思うにキリスト教は宗教と道德の二つからなるが、日本人は道德に重きを置くからだ。だがキリストが第一となされたのは『宗教』である。イエスは『心を尽くし精神を尽くし意(こころばせ)を尽くし主なる汝の神を愛すべし。これ第一にして大いなる誠めなり』と教えた。主には、これが『根本の教義』である。この根本義とは、『神と我との関係』、つまりタテ関係である。換言すれば『キリストによって愛の神を知る事』である。第一ヨハネ 4:19 では、『我ら神を愛するは、彼(神)先ず我等を愛するに^よ因れり』とある。ところが、我が日本のキリスト教は幼稚で、未だこの根本義を^{つか}掴んでいない。だが英国人は先ず天の父なる『神の御前にある修養をする (Practice the Presence of God)』実践を重視する。要は第一に見えない所に神を認め、神を愛する。第二に『己^{おのれ}の如く^{なんじ}隣の人を愛すべし』との道德が立つ。『この根本の教義を各自わきまえて進みたいものである』」。

(b) コメント: 宮川師の上記の教理神学的見解は、根本的なタテ関係的な「神-我」関係がしっかりと確立して、ヨコ関係的な「我-(他の)我・我ら」関係の形成が可能とする洞察を語る。逆に日本人の弱点は、「神の御前でのタテ関係に生きる稽古」が出来ていないのに、己を愛する如く隣人を愛するヨコ関係の実現が可能とする錯覚に捕らわれていることだ。

5. 説教「人間交際の大(本)義」(明治 42 [1909] 年, 10 月)¹³⁾: 主題「教会形成を支える神-人との『交際(交流)愛』の意義」

(a) その要旨: 「創世記 2:18 には、人は一人でいるのは良くないので、神は彼のために助け手を造ろうと考え、女性なる交際相手を造られたとある。そこ

12) 『前編』, 195-205 頁。なおこの説教の中心テキストは、マタイ伝 22:36-40。

13) 『前編』, 354-363 頁。説教の中心テキストは、ロマ書 12:18。

から人はなぜ交際するのかなる問いが起こる。更に、もし人が愛情を注ぐ対象がなかったら、人は自分を磨ける^{みが}だろうかという問いも起こる。こうなると『交際の大義』とは、情の満足であり満腔の愛を他人に注ぐことだ。そこで聖書にある二つの湖を対比しよう。先ずガリラヤ湖は魚があふれ漁ができる湖水で、その水はヨルダン川となり『死海』に注ぐ。だが死海は塩分が大変濃く魚一匹住めない。なぜか。ガリラヤ湖では真水が満ち魚が泳いでいる。反対に死海は水をもらうだけで流れず塩分が濃くなり、魚も生物も住まぬ死の海となった。かくて我がキリストの十字架は、反逆する罪人の罪を赦す主の犠牲愛を示し、教会はガリラヤ湖の如くただ主の愛を受け、倍にして他者へと返す。かくて我々の手本はガリラヤ湖で、主の十字架の愛をただ受け、それを他者に注ぐ心をもって日々歩んでゆきたい」。

(b) コメント：この説教で使われている「交際」という言葉は現代とは違い、100年以上も前の宮川師の時代には「交流＝交際（コミュニケーション）」とはほぼ同義だったことが分かる。それにしても、ガリラヤ湖と死海の特徴を擷んで「真水のガリラヤ湖」と「塩水の死海」を対比する話は、聖書と地理に関心ある人に今なお有効な譬えであろう。

6. 説教「理想の教会」（明治 37 [1904] 年、5 月）¹⁴⁾：主題「理想の教会は『キリストは頭、教会員はその身体』なる教会なり」

(a) その要旨：「現実の教会を形づくる点で使徒パウロの右に出るものなく、彼が世界的教会を形成したことは疑いない。明治初期の組合教会でも、盛んな教会形成が起こった。我が大阪教会は 7 人で出発したが、初めの 15 年間で会員は 323 人となった。しかし、その後保守の風が吹き会員数は減少したが、今日では教勢を立て直してはいる。かくて現実の教会には、使徒パウロの理想の『キリストの身体』なる教会となり、その会員で満ちた体となるのが常に目標である。海外視察で訪れた英国で、牧師ホルトン氏が牧会していた大教会に出席

14) 『前編』、51-61 頁。説教の中心テキストは、エペソ書 4:15-16。

し私は驚いた。ただ宣べ伝えられたみ言葉が教会の皆を貫き、生き生きと聖餐式も守られ、『是ぞ、キリストの身体なる教会』と思わされた。顧みるに、我が組合教会は自由主義、個人主義を発揮し、自分の作った信条をもつ人もいる。だが週ごとの日曜日に神の神殿に集まり、天の恩寵に打たれ、各自が量りに従って働くべきだ。我らが教会はキリストを^{かしら}首、我らはその肢体なる理想の教会を建設する業を進めてゆきたい」。

(b) コメント：この説教における宮川師の教会理解は、当時の組合系諸教会の中に散見される「个人中心・自由主義的」教会観とは一線を画す立場だ。反対にイスラエル-教会を「集合人格的」に捉え「キリストの身体」を有機体的集団として理解する感覚で深く養われていた。この見方を我々も大切に継承し、育んでゆきたい。

C. まとめ

これまで、「説教する人」・「神学する人」宮川師の「教理神学」的な説教から六つの説教例に当たって検討してきた。振り返ると、次の教理神学的な諸主題を採用していた：1. 人の罪過（劣等我・旧我）とキリストにより新我を得る道；2. 贖罪の主の先行の恵みと救済的感化；3. キリストの十字架上の神の愛と義（正義）による救い；4. 「神-我関係」から「我-（他の）我ら関係」へ；5. 教会形成となる神-人間の「交際（交流）愛」；6. 理想の教会は「キリストを頭、教会員はその身体」。これらは、重要だが深き土中に埋まる「教理神学」の六本の根のようなものであった。続くⅢセクションでは、上記六つの「教理神学」の根からどう信仰者の茎・葉が育てられ「福音主義的靈性」の花を咲かせたか？ その答えを探るべく、六つの「靈性育成」の説教を読み、その育成の道の具体例を考察しよう。

Ⅲ. 宮川師の「福音主義的靈性育成」の六主題

——教理の根から六つの「靈性」の花をどう開花させるのか (How Does Spirituality Flower?)

A. 「説教する人」・「神学する人」宮川師が説く「靈性の人」たる道——四段階あるいは三段階論の靈性育成のケース

1. 説教「沈黙の教訓」(明治41[1908]年, 11月)¹⁵⁾: 主題「聖書に養われる四段階的『福音主義的靈性育成』論の例」

(a) その要旨: 「今朝のルカ伝が描く祭司ザカリアは、神命により突如もの言えぬオシ〔原文ママ〕になる試練に陥った。ここで彼は深く神の愛を味わい知る経験をした。新約の使徒パウロも三年間もアラビアの野で沈黙を守り、キリストご自身も三十の歳までは大工仕事に就き、福音伝道まで沈黙を守られた。英国の諺式に言えば『頭が充実した人は口を噤^{つぐ}んで居る人』だ。従って『内面の生活』を深めるには以下の靈性育成の道が必要だ。(1) 聖書を含め読書をし、特に黙読をする。(2) 次にその本や聖書箇所について考察する。(3) 更に神の愛や我が人生を瞑想する。(4) 祈禱する、それも神と心と心で交際する祈りが大切だ。昨今の組合教会の祈禱には、神の名前を唱えて周囲に大演説する者がある。だが真の沈黙とは、上記の四つの靈的实践を通して、神の心を我が心とすることである。あの『ザカリアは、十カ月の沈黙を得て初めて神のみ旨を得たのであって、我々も沈黙して祈るならば、神の聖旨^{みむね}が分かるであろうと思う』」。

(b) コメント: 一見取つき難い祭司ザカリアの試練の物語も、宮川師流「靈性育成」の立場から読むと、四段階からなる「靈性育成的道」となる。逆にこの聖書記事を難しい「聖書の教理」とか「倫理」の関心のみで扱うと、靈性育成の具体的道筋を人は見失う。だから「靈性育成」の視点でこの説教を味わうと具体的な諸段階が説教を通して開ける: (1) 聖書・読書→(2) 読後の考察→

15) 『前編』, 260-275 頁。なお聖書箇所は、ルカ伝 1:20; ハバクク 2:20。

(3) 神の愛や人生の瞑想→(4) 祈禱。それは、祈りと称する「演説」が教会で横行しない為にも！

2. 説教「造化の未成品」(明治 43 [1910] 年, 10 月)¹⁶⁾: 主題「三段階的靈性育成の道の例」

本説教の要旨については、注 16 を参照のこと。本説教は、宮川師の人間の区別(既成品と未成品)を踏まえ、人間は基本的に「未成品」なるがゆえに三段階発展、つまり個人格内での三能力、①身体→②頭脳→③靈性の成長をなすべきだと見る。最初に紹介した説教 1 の四段階論に比較して、本説教は身体・頭脳・靈性という、より簡潔な三分法に立つ三段階的な人間の靈的成長論を説いたといえよう。だから、本説教で、人は「未成品」として、①道徳的修養→②知識的修養→③靈性的修養という三段階を踏み、靈性育成＝靈的修養に長く努めよとの勧めがされている。

3. まとめ

以上の 1. で取り上げた宮川師の二つの靈性育成に関する説教は、本論への導入である。最初の説教では、四段階に分けてどう靈性を具体化して行くのか

16) 『前編』, 446-457 頁。テキストは、コロサイ書 3:10; ペリピ書 3:12-14。その要旨は以下の通りである:「世の中には、既成品と未成品の二つがある。前者は出来上がったもので発展がなく、後者は未だ形なく未来もあり、人間は未成品と言える。だから、知識以上に道徳力は育ちにくい。靈性となるとなおさらである。ライマン・ビーチャーという有名な説教者は、小さな赤ん坊を『限りなく発展すべき心霊』と言って愛したという。五十才や七十才で既成品になってしまってあきませんではダメだ。その意味で、幼な心ある政治家大隈(重信)伯は未成品型で常に前途のある人だったと言えるだろう。イエス・キリストは、神は幼子の口に賛美を備えられたとおっしゃった。使徒パウロは眼中に過去はなく、後のものは忘れて未来に向かって走るという未成品そのものであった。『私どもの修養は知的修養に於いて十年費る。道義的修養に於いて二十年費る。靈的修養に於ては三十年四十年費つて眼鼻が附く位である。……だからこそ、非常に発達し難いところの靈性の発達を^と速ぐるのが人間の楽しみ、人間の妙所だと云ふ事を考へて、靈的修養に殊更に力を入れられん事を切望する次第である』……」。

(How?)に踏み込んで、師は靈性育成の道を指南する。即ち信者の信仰生活の時間の流れの過程で四段階の作法を実行し、大目標は「神の心を我が心とする」目的に至ることだと言う。反対に、簡潔に要約・紹介した第二の説教は、三段階の修養を人間の能力三分論に則してその過程を説明する。この二例は、宮川師の「聖書の教理」を踏まえて「説教する人」・「神学する人」はどう(How?)「靈性の人」の段階の道を歩み、靈的生活を達成するのかを論じている。

では次に、師の説教から更に具体的に説教を通し、教理神学的福音をどう靈性で生きるかに関心を転じよう。

B. 「説教する人」・「神学する人」宮川師が育成する「靈性の人」の形成の道(How?)

宮川師が牧会した大阪教会員の信仰生活では、礼拝の説教・聖書研究を通し「聖書の教理」の六本の根から養分をもらいつつも、会員は教会生活の多様な場面で靈的生活の諸活動という茎^{くき}を伸ばし「靈性育成」の六輪の花々を開花させたに違いない。そこで本論考のⅢ-Bでは、師の会員に対する豊かな「靈性育成」指導を通し、外の世界に向かい信仰共同体は「靈性の花」をどう咲かせたのか、要は(How = 福音をどう靈的に育成・生き様において開花させたのか?)という面に注目し師の諸説教を学びたい(注:「靈性育成」の際に、師が段階分けを明示する諸説教とそうしない諸説教が混在している点に留意せよ)。

1. 説教「聖者の愚」(大正6[1917]年, 1月)¹⁷⁾: 主題「『旧我に死に、キリストにあり新我を得る』靈性」

(a) その要旨: 「使徒パウロは、どこから見ても学者、知者だったが、第二コリント 11-12 章を読むと、自分の愚かさを受け入れよと彼の立場の弁護に力を注いだ。そもそも^{あほう}阿呆とは何か。それは阿呆と言われようと少しも頓着せず、まっしぐらに言うことを為す人である。伝道について考えると、人を多く

17) 『後編』, 195-206 頁。説教の中心テキストは、ホセア書 9:7。

信仰に導いた人には鋭い人はいない。『キリストのために阿呆』になった人だ。和歌山県に昔、J. B. ハールという来日北米宣教師がいた。本国で過ごした彼の青年時代のある日、受洗した以上道を伝えねばと町はずれの家を訪問した。その家の主人は住居に入れてくれ夕食もごちそうになり、最後に家の奥の教会堂に案内した。驚いた若きハール氏が貴方はどなたかと尋ねたら、その教会の牧師だった。彼は『私はカンバーランド教会の牧師です。ハールさん、日本で伝道しませんか』と勧められた。以来彼は『キリストのために阿呆となり』日本伝道に尽くした。我らもパウロの阿呆を学ぶべきだ。預言者ホセアも語る、『預言者は愚かなる者なり』と」。

(b) コメント：この説教の面白さは、宮川師はじめ関西人の「阿呆」の逆説的大活用ぶりだ！ 人は罪ゆえに「旧我」にしがみつが、それは「小阿呆」の道！ キリスト教の救いは「小阿呆」を十字架ゆえに捨て死ぬこと。逆に真の「大阿呆」は先行するキリストの十字架と復活の福音により「旧我」に死に「新我」を得、キリストの為に「大阿呆になる」人だ。故に「我ら小阿呆にとどまるな、キリストのゆえ大阿呆たれ！」。

2. 説教「神の意識と人の意識」(明治 41 [1908] 年, 2 月)¹⁸⁾：主題「『贖罪主の先行の恵みと救済感化』による三段階意識変革による靈性育成の道」

(a) その要旨：「意識というのは、人間の心が目を醒ましている状態で、それを自分が知っている状態のことだ。だが神はお眠りなさる事がない。神は何時でも醒めておられるからだ。だが我々の意識は曇った鏡、神の意識は透き通った鏡だ。それでも、我らは磨けば磨くほど高い方を知り、自分が汚いことが分かる。ルカ伝 15:10 は言う、『一人の罪ある人、悔い改めるならば、神の使者の前に大いなる喜びあるべし』。この世で最高の神意識を有った人はキリスト一人だけだ。キリストは天の父と我とは一つなりと言われたからだ。そのキ

18) 『前編』, 180-193 頁。この説教の中心テキストは、ロマ書 7:21-23; マタイ伝 24:35-36。

リストが、十字架で敵の中にいる己^{おのれ}を殺す者たちの為に祈られたのは主が無色透明の方だからだ。主イエスを前に我々の修養〔＝靈性育成〕の課題は三段階ある：i. 第一の修養は『人意識』で罪の意識を得る；ii. 罪を脱して『天の父と我とは一つ』なるキリストの意識に入る；iii. 最後は『罪を脱して無色透明の境に這入る』。こうして我々は罪を憎む心が盛んになり、汚れを憎む心が深くなっていく」。

(b) コメント：宮川師は、「神は何時でも醒めておられる」方で、同時に「神の意識とキリストの意識」は合致し、「主イエスが敵のためにも十字架において祈られた」方だと言う。主の先行の恵みの故に、師は主イエスを前に我らの修養＝「福音的靈性育成」三段階を提示する。「第一の修養で罪の意識を得」、「第二の修養で罪を脱したいと願」い、「第三の修養で罪を脱し無色透明の境（＝神を仰ぐ）に入る」。これが「救済感化」の靈性育成の道なのだ。

3. 説教「人格の進歩に伴ふ（う）愛の発展」（明治 42 [1909] 年，3 月）^{19）}：

主題『「キリストの十字架上の神の愛と義（正義）の結合」の救い。その靈性は隣人愛から東亜国際関係に及ぶ』

(a) その要旨：「キリストの『己^{おの}が欲するところを他人に施せ』とは、東洋の『己が欲せざることは他人になすべからず』に似ているが、東洋と西洋の相違をも示す。第一テサロニケの手紙 5:25 には、『我らの為に祈るべし』とあり、パウロにとって第一の贈り物は他者からの愛の祈禱だった。北米の雑誌で一人の看護師の物語を知った。彼女は幼い頃に医者が全くいない開拓地で育ったため、愛する母親を病気で失った。その後少女は成長し看護師となって、多くの病人を救うために尽力した。彼女の抱いた『我が内にあるもの（愛）は他人に捧げたい』との思いこそ、十字架のキリストから発する愛に繋がる。だがイスカリオテのユダは、キリストの愛を受けたのに『恩に報いるに^{あだ}仇を以てした』。逆に『恩を思い、恩を返す人にして愛の実行ができるのだ』。日本人のなかでも人格

19) 『前編』、326-340 頁。この説教の中心テキストは、ルカ伝 6:31-35。

の低い人が隣国の韓国の人を虐げることが時に起こり、両国関係を難しくした。個人でも国家でも、人格が高まってこそ初めて高く広い愛の業が出来る事を忘れてはならぬ」。

(b) コメント：宮川師の説教の核心は、「『我が内にあるものはすべて他人に捧げたい』との心こそキリストから発する愛だ」との言葉だ。主の十字架の先行する犠牲の愛と義の業は、ユダが示した「恩に報おうとしない裏切り」の不義の業と対照をなす。本説教は「キリストの十字架上の神の愛と義（正義）が育成する靈性」を一看護師の証しや、東亜関係改善の使命とに結びつけ、国際関係にまで拡大していく「福音主義的靈性」の大型ヴィジョンを示す！

4. 説教「宗教の第一義」（大正9〔1920〕年、1月）²⁰⁾：主題「『神－我関係』から『我－（他の）我ら関係』へ愛を実現させる『祈り』の靈性育成力」

(a) その要旨：「世界の大宗教には、キリスト教・仏教・回教（イスラム教）の三つがある。だが仏教は本来神を中心にしないので、神のない宗教に祈りは無いはずだ。だがこの世ならざるものを探し交わりたいのが人間の宗教心だ。そこで宗教にとって大事なものは、『誰と交わり、誰に祈るか』である。聖書の第一コリント書13章が教えるように、『愛の神に交われれば愛が起こり』、『聖なる神に交われれば我が心が聖くなる』。英国首相L. ジョージは多忙な人だったが、祈りを通しての神との交わりの時を大切にしていた。二、三年前に、久しぶりに金森通倫君と会ったが、彼と私とは神学的に違う（注：金森は自由主義、宮川は福音主義）。この二人が会って祈り始めたら長い祈りとなった。終わった時、二人の眼には涙が浮かんでいた。祈りと祈りが真に交わりを結ぶことを可能としてくれた。かくして私は一人でも多くの諸君と『祈禱の友』になりたい。是非金曜日の祈禱会に多く参加され、皆さんが時をこしらえて祈りに進まれんことを切に希望している」。

(b) コメント：なぜ教会で、宗教では「祈り」が大切かという問いに対し、

20) 『後編』、400-412頁。この説教の中心テキストは、コロサイ書4:2。

教理的に、「靈性育成的」に答えるのが本説教の趣旨だ。先ず聖書的には、「第一コリント書 13 章が教える通り、『愛の神に交われれば愛が起^きき、聖なる神に交われれば我が心が聖^{きよ}くなる』。『教理神学』的に言えば、愛の「神-我関係」から「我-（他の）我ら関係」に導く愛が起^きこり心が聖^{きよ}くなる。だが、この愛の働きを「靈性論」的に語るのが本説教だ。神学的には合わぬ宮川師と金森師が長時間折り合ったら、互いに涙を流すほど関係が深まった。その秘密は「真実の祈りと祈りが二人を結び直した」からだ！ 「教理神学」はしばしば喧嘩を引き起こすが、祈りは人格的に結び直す！ 教理ではなく祈りがそう導いたのだ！

5. 説教「愛の充実」（大正 7 [1918] 年, 11 月）²¹⁾: 主題「教会形成となる神-人間の『交際（交流）愛』に生きる靈性の働き」

(a) その要旨: 「地上に生きている存在は皆、愛を受けなければ生き得ないものである。人でも馬でも同じである。英国では、夏には馬を蚊帳^{かぶ}にいれ虫を防ぎ、冬には着物を着せて温かく過ごさせる。これは人の馬への愛情であるが、愛には個人的なものと団体的なものがある。新約聖書に描かれる主イエス・キリストの生涯は、愛の生涯だと言ってよいが、『十字架上の七言』のうち『我は渇く』以外の六言では、主イエスの心の愛の現れでないものはなかった。ところが、十九世紀以後のキリスト教会は個人主義的な愛で社会奉仕を行ったと言われる。だが、W. ブース大将の救世軍の社会活動、キリスト教青年会 (YMCA)・女子青年会 (YWCA) のように団体的に愛を実践した流れも現れた。その点で注目したい聖書箇所は、第一コリント書 13 章で、使徒は、信仰・希望・愛のうち最大のものは愛であると主張する。我が教会（注：組合教会）も、神の栄光を現さんがため、団体的な愛を現す機関を創出する必要がある。是非皆様の協力を得て実現したいと願うものである」。

(b) コメント: 上掲の宮川師の説教のポイントは、愛には個人的なものと団体的なもの二種あるが、主イエスの「十字架上の七言」のうち六言が示すよ

21) 『後編』, 339-350 頁。この説教の中心テキストは、コロサイ書 3:12-17。

うに、教会形成となる神－人間の「交際（交流）愛」に生きると主は語られた。師は、第一コリント書 13 章の聖句も併せ、救世軍、YMCA 他の「団体的な愛を現す機関」を組合教会や諸教会が支援すべきことを提言する。これは「交際（交流）愛」の理念に連なり、諸教会が「福音主義的靈性」向上の使命を盛り立てる具体的応援の一つと考えるからであろう。

6. 説教「教会とデモクラシー」（大正 8 [1919] 年、6 月）²²⁾：主題「理想の教会はキリストを頭・教会員はその身体なる共同体だが、会衆派政治を守り選任会長を頂く民主的集団たろう！」

(a) その要旨：「使徒行伝 1-2 章によれば、十二弟子の中から裏切り者ユダが落ちてゆき、その後、マッテヤが選挙で選ばれた。加えて執事も七人が選出された。そのお陰か、主の弟子たちは増えて三千人に達した。とすれば、キリスト以来の最初の政治形態はデモクラシーの会衆政治で、その後長老政治、監督政治が登場した。ところが明治後の日本の教会はその逆で、最初に北米から長老教会、監督教会、バプテスト教会が来日し伝道した。遅れて L. L. ジェーンズ氏の熊本バンドと、会衆派のボードの宣教師らが組合教会の伝道を開始した。さてデモクラシーとはリンカーンの言う『人民の、人民による、人民の為の政治』だ。だから大阪教会は、牧師の教会や長老の教会ではなく、すべての会員の教会だ。その会衆派の長所は、『愛教会精神』を育むことだ。だが、逆に短所は統一的にやれないことだ。近年の英国会衆派を見ると、教派の会長を選挙し、その人が教派の個教会を回り助言して助ける。この会長制を設ける案も、一つの考慮してみる案であろうと思う」。

(b) コメント：宮川師の見解では、初代教会はリンカーンの「人民の、人民による、人民のための教会」に近い民主的会衆政治で出発した。だが 19 世紀に日本宣教を開始した会衆派は長老派や監督派等の教派に遅れて出発した。その

22) 『後編』, 384-399 頁。この説教の中心テキストは、ヨハネ伝 8:32; 使徒行伝 6:2-4 である。

日本教会史のなかで、組合教会は、長所の「愛（個）教会精神」を発揮し、短所の「統一的な視野がない」弱点を克服する必要がある。一案として英国の選挙された「会長」が全体的視野で教会を見て個教会も助ける工夫で欠点を補うとの提案が一考に値すると師は考えていた。考える余地ある見方だ！

C. 「説教する人」・「神学する人」宮川師が育成する「霊性の人」の歩み—— まとめ

(a) 問：「説教する人」・「神学する人」はいかに（How?）「霊性の人」の生活を達成するのか？「霊性の人」の場合でも「救済論」的要点はほぼ同一である。

(b) 即ち、1. 人の罪過（劣等我・旧我）とキリストにより新我を得る；2. 贖罪の主の先行の恵みと救済的感化；3. キリストの十字架上の神の愛と義（正義）による救い；4. 「神－我関係」から「我－（他の）我ら関係」へ；5. 教会形成となる神－人間の「交際（交流）愛」；6. 理想の教会は「キリストを頭、教会員はその身体」。以上である。

IV. 結び 聖書的教理に立つ霊性育成へ ——宮川経輝牧師の説教が描く救済の神学

これまで、Ⅱでは「説教する人」・「神学する人」宮川師の説教と神学訓練に養われた大阪教会は教理を教会内外に伝達することにあつた。再度、花栽培のイメージを使えば、「教理神学」（What?）とは、植物の見えにくい土中に撒かれた種から生じた六本の根のようなものだ。だが師と大阪教会の教会生活では、土中の「教理」の六本の根っこから養分をもらいつつ、地上では茎から育った枝と葉・花が開花する。だから、次にⅢでは、副題で「福音主義的霊性育成」の努力と呼び、いかに（How?）師が土中の六本の根から「六輪の花」を咲かせる「霊性の人」の群れへと開花・結実させたか、このⅢの「霊性育成」に関する宮川師の諸説教から学んだのである。

だから「教理」と「霊性」の六テーマは、1. 人の罪過（劣等我・旧我）と

キリストにより新我を得る道；2. 贖罪の主の先行の恵みと救済的感化；3. キリストの十字架上の神の愛と義（正義）による救い；4. 「神－我関係」から「我－（他の）我ら関係」へ；5. 教会形成となる神－人間の「交際（交流）愛」；6. 理想の教会は「キリストを頭，教会員はその身体」であった。

これら諸テーマは「説教する人」宮川師により「福音主義的教理」が教会形成的な福音と教理という「神学する人」の福音として語られただけでなく、信仰生活のただ中で咲く福音主義的「靈性の人（人々）」として宮川師と教会の証し・生活を通し道徳的・社会的・文化的に育まれて、教理神学と靈性において豊かに育成されていったのである！

最後に、この事実を教会史的に総括すれば、宮川経輝牧師の貢献は、「福音は^{なにも}浪花を走り 靈性へ」と総括可能であろう。なぜなら、宮川師と大阪教会も、植村正久師ら同時代人に劣らず、福音主義的神学と靈性実践において独自の発展と開花に貢献した！ 我々の課題は、宮川師の残した大きな教理・靈性の資産に常に目覚め継承を図っていくかどうかだ！

（たなむら・しげゆき）